

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

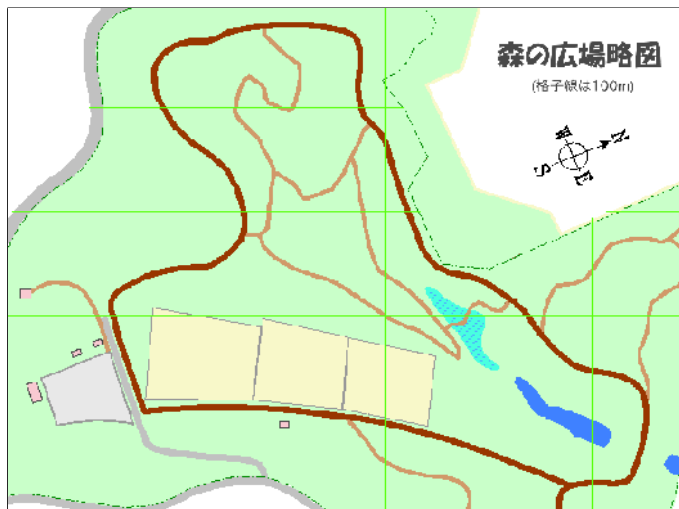
誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	21 / 2007 / 38-40
タイトル	第2回「森の広場市民観察会」の報告
著 者 名	編集部

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

第2回「森の広場市民観察会」の報告

2006年9月10日、第2回目の「森の広場市民観察会」が新城の「青森市森の広場」で開かれました。

この観察会は、「青森市森の広場」が14年前の平成4年に開設されてからスポーツ広場が一部市民に活用されているだけで、広大な森、草原、池などの自然環境が多くの市民に知られることもなく放置されていることから、その有効活用ができないかと青森市に拠点をもつ自然環境に関わる8団体が青森市など各方面に共催、後援を得て2006年5月から始めた事業です。



【図1】森の広場概略図

関係する8団体の打合せで、それぞれの団体が毎回順代わりで「幹事」を担当することになっており、今回は、「やぶなべ会」が中心となつての開催です。

第2回目のテーマは、「秋・森の広場ようこそ! 秋の鳴く虫・草花観察会」とし、さらに通り一遍の観察会ではなく、広く市民との文化交流の一翼をになおうと俳句の会にも呼びかけて後援をいただき、多くのかたがたのご協力のもとに結果的には市民観察会の新しい方向性を見いだすことができました。

■ 直前の準備

2006年の夏は真夏日が続き記録的な高温の年になりましたが、一方長期予報では開催日とした9月10日あたりに天候の崩れが予想されました。選ばれたテーマは、生き物たちのそのときの微妙な生理や生態をターゲットとしただけに、順延などの調整がきかないものと覚悟をする必要がありました。そのため雨天の日を想定して周到な準備を進めることになりました。

植物部門は、開催日が近づいてから、この時期この場所にはどの程度の草花、あるいは果実が観察できるのかを確認するため、観察会前日に下見を行いました。ガイド対象となる植物名を予定ルートを回って確認し、開花中が47種、結実が18種などと、合わせて100種ほどの植物がルート沿いで観察できることが分かりました。

動物部門のうち「鳴く虫」のバッタ、キリギリス、コオロギ類はどうするか!。常識的には好天の場合、午後でしかも遅い時間のほうがベターです。観察会のスケジュールはこのことを考慮しましたが、首尾良く観察できない場合に備えて生きた虫たちを集め、ガイダンスの時間を利用してスクリーンに大写しでご覧に入れようということになりました。スタッフはこの作業に1週間ほどを費やし、準備ができた生きた昆虫は24種でした。他に番外としてモリアオガエルなども展示しました。

鳴く虫を提案したスタッフのIさんは自ら中心になって虫とり作業にあたることになりましたが、観



[写真 1] 生きた昆虫の展示準備



[写真 2] 事前ガイダンス



[写真 3] 野外観察の様子

観察会本番の展示が終わったとき、ホッとした面もちでつぎのように述懐していました。「こんなに一生懸命、バツタやキリギリスとりに夢中になったのは 50 年ぶり。あの頃は青森市の今の操車場跡地に近い所に家があり、ここの遊び場で難なくいっぱい集めたものです。今回は環境が変わったといっても自信はありました。ところがいざやってみると過半数は簡単に集まってまだ勘は大丈夫だと思いましたが、キリギリスがどうしても採れません。最後は八甲田山の田代高原だと 3 人で出かけようやく 1 匹を捕まえました。一部の虫は少なくなっていました」と語ってくれました。

■ 生きた虫とアップ映像に目をくぎづけ

9 月に入っても好天は続いたのに 10 日の本番の日は天気の谷間、朝から強い雨になりました。しかし長続きはしないで止むとデータ解析に強い M さんから、「森の広場の昼過ぎの降雨予測は 1 ミリ～3 ミリの小雨。風速は地域時系列で 15 時頃まで 3～5m/s。以上から予定通り決行し早めに屋内管理棟に戻ることに。」というメールが飛び込みました。

よし、準備を進めてきた大型映像からご覧に入れよう。生きた虫の展示も完了、生態写真の貼り付けも OK で準備万端。

嬉しいことに、観察会開始時間の 1 時間も前から参加者が続々と詰めかけてきました。開催の有無を問い合わせてきたのは 1 件だけです。青森山田高校の理科研究

会に入っているという高 1 の生徒は雨にずぶ濡れになって自転車でやって来ました。虫が大好きという 8 つの男の子もお父さんと網をもって来ました。秋の草花をみたいと 80 歳の女性はただ一人バス(岩渡行きの路線バス)に乗ってやって来ました。ひときわ目立って俳句同人「薫風」の主宰者・小野さんをはじめ 12 人の方々が到着。これで関係者も入れて 42 人が勢揃いしました。

「バツタはバツタでもこんなに種類があるんですか?。キリギリスもこんなに大きさや姿かっこうが違う!。コオロギもエンマだけでないんですね!。…」次から次へと大写しされる鳴く虫オンパレードに目はくぎづけ、さらにメモをとっています。

展示された生きた虫もときどき鳴き声を奏でていました。際だって美声を響かせているのはスズムシ。これはここに住んでいないのですが、Y さんが飼育中の数百匹から小分けして飼い方のメモと一緒に差し上げました。「お帰りにどうぞお持ちください」には大歓声。

予定通り 2 時半から野外観察に入りました。「森の広場」には一周 1.6 キロの観察ルートがあり、俳句グループと一般グループの 2 班に分かれて植物、動物のガイドが名前や特徴などを説明しながらの観察です。

現地では、生長の旺盛なサンショウの木があり、この小粒の実にはふさわしくないほど「たわわ」に赤い実をつけていました。小雨模様であったのが幸いしたのか、方々から虫の音も聞こえ、甲高い声のわりには体がか細いカンタンもススキの葉っぱに止まっていました。

質問がつぎつぎと出て、「オオウバユリの大きな果実をみて花はどういう色なのか」とか、「ヌスビトハギってどうしてこんな名前がついたの?」とか。俳句グループには先頭に立ってあと何分などと時間読みの導き役がいました。このあとの大事な作業があるのだそうです。

■ 俳句会のセレモニーに興味津々

俳句グループは3時半すぎには管理棟の集会室に集まりました。メンバーは五七五の17文字にそれぞれの思いを託し、2句ずつを創作。主宰者の小野寿子さんが短冊に見事に書き込んでいきます。会場には幅の広い紅白のテープが張られ、1枚1枚の短冊をテープでそれに貼っていきます。4時、一人持ち票2点で好きな句に付箋をつけていきます。短冊は27句、あれ?12人のはず。おかしい。

小野さんが詠み上げ、付箋をつけた人、つまり票を投じたひとの感想を披露してもらいます。最初に4選句、ついで3選句、…。最後に小野さんの講評があり作者を明らかにしてもらい、作者はその心を吐露します。会場には一般グループも参加して、拍手喝采!

ところで小野さん、この「オニヤンマ羽音残して風にのる」はどなたですか?。4票入った4句のうちの1句です。鳴く虫を50年ぶりに集めていたIさんの挙手に場内が大拍手。小野さんから賞讃のお言葉。Iさんはトンボの専門家でもあるのです。いつもの思いがこの場で昇華したのでしょう。もうひとり部外者でEさんも2句を寄せていました。季語があれば良かったのだが、という講評。Eさんは水生昆虫の専門家だが書家としても誉れ高く、今度は俳人として脱皮するかも知れません。

午後4時ぴったりで観察会、句会が終了。次回を期して散会しました。



[写真4] ヒメクサキリ♀



[写真5] ツリバナ



[写真6] カンタン



[写真7] 俳句の講評